

家と家族

— 思い出は何のためにあるのか

前編

さとうこうじ
佐藤浩司

(建築人類学・建築史学・国立民族学博物館)

インターネットやユビキタスといったテクノロジーの登場により人間関係のありかたにも大きな変化が起こり始めている。家とそこに住む人を建築人類学という独自の視点で研究し続けている佐藤浩司氏を訪ね、その研究から見えてきたものについて語ってもらった。

聞き手
田村和彦

(関西学院大学教授・関西学院大学出版会編集長)

【青い鳥をもとめて】

田村 佐藤さんの活動のコンセプトは、建築と人類学や民族学をつなげていくというものですよね。

佐藤 家は人間社会を見た上で建てていくべきものだと思いますが、今の建築学はそういう環境にない。工学的な数字が先行して僕らが住んでる環境とは全く別な家が出てしまう。建築の原点を知ろうと思ったら調査をするしかなかったんです。日本の民家はすでに修復が終わって管理されて残っている状態です。そこでフリーピンやインドネシアの調査をしました。そうした民族建築のような環境に行けば今でも村の人たちが維持している家があるのではないかと。家が生きていくことの証であるような社会を見たくて、夢を追ってインドネシアに行ったのです。面白い家はいっぱいありました。けれどインドネシアの人自体はもって現

代的な家に住みたい、伝統的な家には住みたくないと思っていたんです。日本にはそういう伝統的なものはないと思って調査に行ったんですが、日本の家はいかに現代的でも木造で、高床で、床材は草だし、壁は土で、扉は紙でつくられていたりする。日本のほうがはるかに伝統を現代に生かしているのではないかと思えてきました。

田村 伝統的な家屋の住みにくさというものもありますしね。

佐藤 そうした立派な家が残されている環境というのは生きる目的がとて明確であり居心地が良くないんです。結婚して子供を産んで、自分が死んだら子供たちが跡取りになって自分の霊を守ってくれる。そういう形で祖先の霊を家の中で守ってきたからこそ、あのような家が維持できた。すると幸せでない人も明確にいるんですね。結婚できなかった人とか、男の子もできなかった人とか。

田村 輪の中に入れなかった人たち。

佐藤 そういう人たちは一般の大人と認めてくれない。はたしてそれは我々の望んでいる社会かというところ、そうは思えなかった。それでちよつとシフトしていきましたよね。

【近代社会の移動性】

田村 佐藤さんの一貫した関心は「移動の家」にあるようですが。

佐藤 戦後の日本の教育では農村社会を日本人の原点にしてきました。しかし今の都市生活では家を持つてもそこにずっと子々孫々住み続けられるという環境にはない。インドネシアの家は農民の家だから一つところに住んで立派な家を維持している。そういう社会に疑問を感じていて、伝統的な家の調査をしていても先が見えないと思っていたとき、ポルネオで狩猟採集民の調査をしたんです。彼らの家の中には祖先や靈魂のいる場所

※二〇〇五年に国立民族学博物館で行われた特別展。会場内に家をつくり、各空間にアーティスト、路上生活者、知的障害者らが制作した作品を展示した。
http://www.minpaku.ac.jp/special/brico/brico_top.html

本展の図録は「プリコラージュ・アート・ナウ 日常の冒険者たち」青幻舎。

がない。禁忌の空間が全くありませんでした。しかし彼らは家の中では子供を産まないし、家の中で人が死ぬとその家を捨てて逃げてしまったりする。あつてはならない、自分が理解できないことが家の中で起きるということを確認していないと思います。それは実は我々の現代社会とそっくりなんです。家の中に禁忌の空間はないし、僕らは自分の家で生まれて自分の家で死にたいと思っただけで、実際は病院で生まれて病院で死ぬ人が95%以上です。我々が今住んでいる家とポルネオの狩猟採集民の家はとても近いことに気がついた。百年住宅といって日本の住宅を日本の古い農家や民家のような形にしようという動きがありますが、建物としては百年残るでしょうけれど住む人がずっと続くという保証はない。百年住宅をつくるなら住宅を流通させるとか世代交代するといったことを考えなくては。僕は家の中で濃密な人間関

係を期待するような家ではなく、むしろ全く知らない人が入ってきて住めるような家を考えています。それには個々の部屋は閉ざされていたほうがいい。プライベートな空間とパブリックな空間がひとつの家の中でさえ共存しているような。そうすれば個々の人間の自立も高まるし、同じ家に住んでいたから連帯責任を持たなければいけないという話でもなくなるんじゃないか。今はネット社会で携帯電話もあって、ひとつの家に住んでも余所の世界とはるかにつながっているのに、そこに共同体的なものを求めていくとそれはストレスにしかならない。そうではないルーズな社会を目指そうと思っているんです。

【プリコラージュの社会】

佐藤 去年みんばくで「きのうよりワクワクしてきた。プリコラージュ・アート・ナウ…日常の冒険者たち」※という展覧会を開催した。路上生活者、知的障害者らが制作した作品を展示した。

会をしました。プリコラージュ・アートという言葉の中には、ある理想の社会を指してそれにそぐわない人はリストラされたり落ちこぼれたりするのではなく、まずどういう人がいるのかを考えてその人たちが集まって社会のイメージを考えましょうということが込められています。プリコラージュって本当はモノのことだけではなく人間とか社会にこそ求められるのではないかと思います。

田村 近代社会がもつ移動性や、個がバラバラに生き始めてしまったことはもう逆戻りできない動きなのでしょう。

佐藤 携帯電話で四六時中コンタクトがとれるような今の社会では、人間同士がつながれる可能性はかつてよりも強くなっていると思います。問題はそれに空間的な限定がないことです。同じ空間にいるから親密だとはいえない。空間と親密さとのパラレルな関係がくずれてきている。僕は肉体を抱えて生きているか

ら同じ空間というのは否定できないけれど、それなら同じ空間の中であまり濃密でなくルーズな人間関係をいかに築いていくか、いかに疎遠な人間関係を築いていけるかを考えていかないと、同じ空間の中で暮らせなくなる。

田村 家や家族が一種の神話づくりに荷担しているところがありますね。どう生きなければならぬか、器のほうから要求して「こういうライフスタイルはいかがですか」と提案する。

佐藤 住宅も家族もイデオロギーだと思っているから、それに縛られていくと生きづらくなってしまう。本当のところは家族でも住宅でも生きる糧であるべきだと僕は思うけれども、そのためにいかにルーズかかっていうことを、逆に言っているわけ。

【モノと記憶】

佐藤 「2002年ソウルスタイル」展※で

調査して結論として均質な社会をイメージしてしまおうと、それはどこか違うものになると思ったから、そうならない手法を見いだすためにモノにいったのです。大量生産されたモノは品質でいえばみな同じですが、それを同じと言ってしまわない方法といったらその個々のモノに込めた個人の思いということになってくる。それをやらない限り人間の個性はでないかと思っていたんです。同じ鉛筆でも文房具屋の店先にある鉛筆と、自分の筆箱にある鉛筆と、友達の筆箱にある



佐藤浩司

鉛筆とでは「違うんですよ」と言うところからひとつ始まると思うから。家も長く住んでいれば自分の歴史を込めているのだから自分にとっては大切なモノであるべきです。ところがある人にとつての価値は他の人にとつてはゼロどころかマイナスだから、十年たったら家の物理的な価値は下がってしまう。でもそれは認めたくなかった。認めてしまうということは個人が生きている存在を認めないことだから。農家でも骨董品でも時間が経過すればするほどそれが価値に転じていくわけでしょう。しかし我々が持っている家や大量生産されたモノでは資産価値が減っていく。そこに釘をささないと個人の人生が救えないと思ったから、あえて「2002年ソウルスタイル」では本当にガラクタみたいなモノでも全部調査してそれぞれへの思いをとらえていったんです。そうして聞き取りをしていくと価値がないと思っていたモノまでも価値が



田村和彦

はいかに今の団地住まいのようなものを評価していくかを考えていました。最初は冷蔵庫の中のモノを全部引っ張り出してきて、一個一個写真に撮るところから始めて、そのままズルズルとたぐり寄せるようにして家中のモノを全部写真に撮っていったんです。

田村 アパートというのは全部の居室が同じような平米数で、間取りも大体同じですよ。ただし中身がみんな違う。

佐藤 現代社会では個性が非常に多様になっていくはずなのに均質なアパートを

あるように思えてくるんですね。それをもっと一般的に認知されるような形で、その価値を言っていくということの方が、今戦略的に考えていることです。リサイクルといった次元の問題ではなく、個人が生きていく意味をその中に見い出していくこととしているのです。

田村 今の日本の住宅の中のモノの溢れかたも、完全にピークに達してしまっただけでも買わないという状態でしょうか？

佐藤 でも買うのは、何故か。それは自分の生き甲斐のためとか、生きていく証とか、きつと何かあるんだろうと思う。「世界の家」(TOTTO出版)という本があります。家具を全部出して写真に撮っていつか、日本が最後に登場しますが、圧倒的な数のモノで量が多い。日本はほとんどでもない数のモノに囲まれて暮らしているそれが全部情報だと思ったら実はすごい情報の網の中に我々は住んでいるんだなあ、と思いますよ。